☆校長雑感☆　第９回　「早送り VS 遅戻し」

今回は、最近読んでいる本の感想から始めます。編集者などをされている稲田　豊史(いなだ とよし)さんが書かれた「映画を早送りで観(み)る人たち」という本です。

最近、通信設備の発達で、さまざまな映像作品をテレビだけでなく、スマホなどでも手軽に見られるようになっています。

そんな中、本来は２時間ぐらいある映画などの作品を、1.5倍速で見たり、会話や動きが少ない場面は、躊躇(ちゅうちょ)なく10秒ずつ飛ばして見たりする人が増えているというのです。

ある会社の調査では、20～69歳の男女で倍速視聴の経験がある人は34.4%、中でも20代の人全体の49.1%(ほぼ半分です)が倍速視聴経験者だとわかったそうです。

稲田さんは、編集者としての面と、倍速視聴をする人たちへのインタビューなどから、そこには２つの背景があると述べています。

１つめは、倍速視聴をする人は、仲間同士の話題についていきたいのですが、見るべき作品や開くべきＳＮＳが多すぎて時間がなく、倍速視聴という「時短」がその問題を解決しているという面です。

もう１つは、最近の言葉で「タイパ(タイムパフォーマンス)」があるように、時間をかけて結論にたどり着くよりは、近道を探すことを良しとする風潮があることです。そのような人にとっては、無駄のように感じられる時間は「タイパ」が悪く、早く結末を知りたいと思う、というのです。むしろ、結末を先に知ってから改めて最初の方からじっくり見るという見方をする人もいるそうです。

そういえば、最近「１０分で読める○○」のように、本来は時間をかけて読む本のダイジェスト版のようなものがよく読まれているというニュースも聞いたことがあります。

ここでは、倍速視聴の良し悪しは置いておいて、私（校長の栗林）の映像作品との“向き合い方”を紹介します。

私は「趣味は何ですか」ときかれれば「映画鑑賞です」と答えます。たとえば、映画館で映画を見て気に入った作品だったら、後日発売されるブルーレイを買って家でも見る、というのが大体のパターンです。

だから、倍速視聴は基本的にしません。自分が気に入って買った作品なので、見たいなと思ったら、片手間ではなく、その作品だけに集中して見ることがほとんどです。

そういう見方なので、見ていて「おや、今のシーン、この人物はどんな表情だった？」とか、「え、今の英語のセリフ、何て言った？（字幕と合ってた？）」と、何回か見ている作品であっても、気になる場面がときどき出てくることさえあります。

そんな時、そこが気になって、「今の場面、もう１回」とリモコンボタンで巻き戻してもう１度見直すことがあります。そして、新しい発見をしては喜んでいる、という重箱の隅をつつくような見方をすることがあるのです。（ちょっと気持ち悪い見方かもしれませんね。自分でもそう思いますが…。）

そんな見方をしていると、倍速どころか本編の時間より少し長く時間がかかってしまうんですよ。いうなれば、「早送り」に対抗して「遅戻し」をしている、とでもいいましょうか。

ただ、私としてはそんな長い時間をかけても、あまり長いとは感じないのです。その見方も自分に合っているという感覚でしょうか。

ですから、今回の結論としては、「早送り」だろうが「遅戻し」だろうが、自分にとって一番心地よい楽しみ方がベストといえるのではないでしょうか、ということです。みなさんにとっての心地よい楽しみ、とは何でしょうか？